

漢語北方方言における方言境界線と方言区画: 等語線重ね合わせ法の実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34876

漢語北方方言における方言境界線と方言区画

—等語線重ね合わせ法の実践—¹

日高 知恵実

【キーワード】 漢語方言、官話、等語線、方言区画、『漢語方言地図集』

1. はじめに

本稿は、2008 年に中国で刊行された『漢語方言地図集』を依拠資料とし、これらに基礎作業を加えることで、以下の 2 点について言及するものである。

1 点目は、漢語北方方言²における方言境界線についてである。漢語方言の分布パターンや方言境界線に関する研究はこれまでも進められてきており、例えば岩田（1995）、O.I.Zavyalova & E.B.Astrakhan（1998）、岩田（2000）、曹志耘（2011）などといった研究成果がある。しかし、等語線を実際に引いてそれらを重ね合わせるといった基礎作業を踏んでいるものは、漢語方言研究ではあまり多くない。そこで本研究では、『漢語方言地図集』に収録されている 510 枚の地図全てを分析対象とし、体系的且つ帰納的に漢語北方方言における方言境界線を明らかにする。こうした研究を進めていくことは、言語学のみならず、将来的には他分野への貢献に繋がるだろう。

2 点目は、漢語方言区画の妥当性についてである。これまで漢語方言区画は、特定の言語特徴に基づいて帰納的に分類するか、演繹的に分類した上で各方言区の特徴を列挙するといういずれかの方法でしか作成されてこな

¹ 本稿は、平成 24 年度修士論文（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程）に修正を加えたものである。

² 本稿における漢語北方方言とは、長江以北および貴州省・雲南省といった西南地区で話されている漢語方言を指す。西南地区は地理的に見れば北方とは言い難いが、明清時代に四川を通じて西南地区の開発がおこなわれており、その結果、言語的にはこれらの地域も北方と同じ系統と見なされている。【王育徳（1967）参考】

かった。例えば現在最も権威のある漢語方言区画は、中国社会科学院とオーストラリア人文科学院が共同編纂した『中国語言地図集』であるが、この中で官話³は「古入声の帰属状況」という 1 つの音韻的特徴により 8 つに下位分類されている。これは李栄が「古入声こそ官話の地理的差異を反映する指標になりえる」と考えたためであるが、現在に至るまでその妥当性を検証する画期的な手段は存在しなかった。そこで本稿では、基礎作業で明らかとなった等語線や方言境界線を現行の方言区画(『中国語言地図集』『中国漢語方言図』)と比較させることで、その妥当性を検証する。

井上(2001)では、近年における日本方言区画研究について、次のように述べている。

方言区画論が全国の方言を総合的にとらえる作業だとすると、言語地理学は言語現象を個々の語の段階にまで分解し、アトミスティックにその分布と歴史を探究する分野だった。最近再び方言区画を目指した新たな試みが現れているのは、個々の言語地図の分析を踏まえて、再び総合的把握に向かいつつあるものと、位置づけることができる。

中国ではまだ方言地理学が導入されたばかりだが、このように個々の言語現象を扱う方言地理学の成果を反映させることで、従来とは異なる観点から方言区画研究を進めることが可能となるのだ。

2. 等語線と方言境界線

2. 1 等語線・方言境界線とは

「等語線」(isogloss)とは、「等～線」という形式からもわかるように、「等高線」「等温線」などといった自然科学の分野からヒントを得て生まれた概念で、1892 年にラトビアの言語学者アウグスト・J・G・ビーレンシュタインによって初めて用いられた⁴。等語線という用語の定義は、複数の論文・著書・辞典などに見られるが、本稿では以下の定義に基づいて議論を進めていく。

³ 「官話」という用語の定義は研究者によって見解が異なっており、長江以北および西南地区全体を官話と見なす考え方と、これらの地域を官話と晋語に分ける考え方とがある。晋語については後述する。

⁴ “同言线(isogloss)这个词由拉托维亚语言学家 J.G.A.Bielenstein 于 1892 年首次使用。”[項・曹(2005) 61 頁]

音・語彙・語法などの何らかの言語特徴を共有する地域と、共有しない地域との境界を示す言語地図上の線のこと【田中(1988)】

一方、「方言境界線」とはどういった線を指すのだろうか。柴田(1977)によると、等語線が「1つの言語現象の分布地域を区切るために引く線」であるのに対し、方言境界線は「体系的に異なる2つの言語の地域的境界に引く線」であるという。何を以て「体系が異なる」とするのかについては更なる議論が必要であるが、少なくとも等語線が単一の言語特徴に着目するのに対し、方言境界線は複数の言語特徴に着目する必要がある。そのため、等語線のまとまり、いわゆる「等語線の束(bundle of isoglosses)」を方言境界線だと見なす考え方があり、本稿もこれに準じるものとする。

こうしたことから、帰納的に方言境界線を明らかにするには、複数の等語線を重ね合わせる必要があると言える。本稿ではこれらの作業や手法を「等語線重ね合わせ法」と呼ぶことにする。

2. 2 等語線をめぐる諸問題

等語線は前述したような定義がきちんとあるにも関わらず、いざ線を引くとすると、様々な問題に直面する。本稿では先行研究を参考にしながら、これらの諸問題に対する筆者の見解を述べていく。

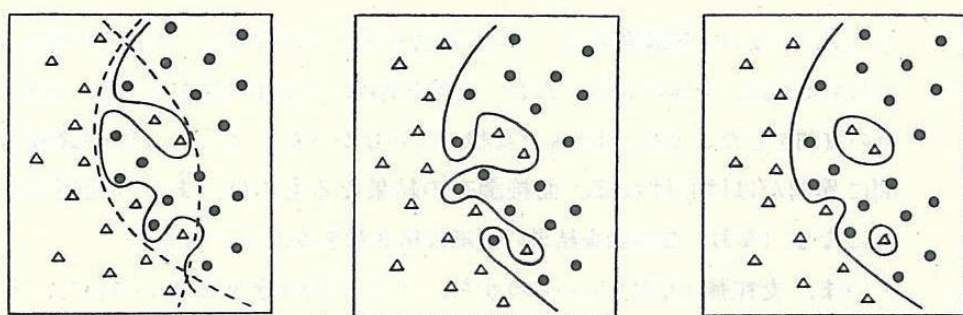
(1) 分布が入り組んでいて線が引けない

方言地図を見ていると、「ある言語特徴を有する地域と有さない地域の境目がはっきりしているもの」と「分布が入り組んでいるもの」とがある。前者の場合、等語線を引くのはたやすいが、後者の場合はどうすべきだろうか。結論から言えば、等語線が引けない、あるいは引きにくいと判断した場合は、無理して引く必要はない。なぜなら、方言の境界を明らかにしようとする際、分布が入り組んでいる、つまり過渡的だという情報は不必要であるし、更に言えば、入り組んだ等語線は他の等語線と重なることはなく、結果的に線を引いても意味を成さなくなるからである。

(2) 等語線の引き方が複数通り考えられる

徳川(1962)は、等語線の引き方について言及した先駆的な論文である。この論文によると、【図 1】のように、全く同じ方言地図でも等語線の引き方が

複数通り考えられる場合があるという。こうした時の対処法として、徳川は「調査地点の密度を高める」「材料の信頼性を考慮する」「語の性格を考慮する」「地域の状況を参考にする」「仮説と照合する」という 5 つの観点を提示している。しかしながら、等語線を引く際、これらの観点を全て反映させるのはほぼ不可能である。というのも、1 つの小さな集落を 1 人の人間が全て調査するのであれば話は別だが、『漢語方言地図集』のような地図を扱う場合、細かな点を気にしていたら埒があかないからだ。そのため、最終的には、ある段階で思い切って、自らが最も適当だと考える地域に線を引く必要がある。

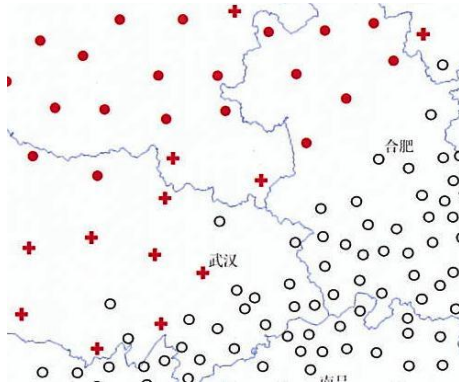


【図 1】「等語線の引き方に関する一例」⁵

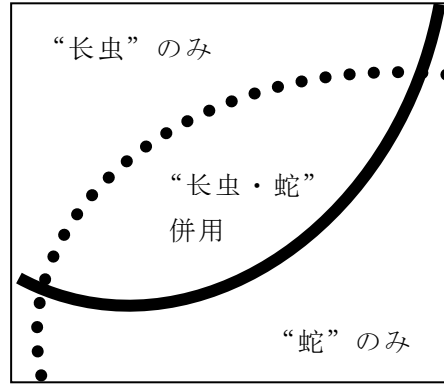
（3）併用型をどう扱うべきか

複数の方言のグループが接触している地域では、話者が複数の方言を併用していることがある。等語線を引く際、こうした併用型はどのように扱うべきなのだろうか。例えば、語彙巻 035 “蛇”（蛇）を見てみると、河南省・湖北省・安徽省の境目付近では“蛇”と“长虫”を併用しているのがわかる（【図 2】参照）。この場合、地域的には“蛇”のみ」「蛇・长虫”併用」「“长虫”のみ」という 3 つのグループに分けることができるが、等語線自体は“蛇”を使用するかしないか」「“长虫”を使用するかしないか」という点に基準を合わせて引くべきである。これを図式化すると、【図 3】のようになる。

⁵ 原図は、徳川（1962）に基づく。



【図2】「蛇」の分布⁶



【図3】「蛇」の分布の図式

(4) 等語線を引く基準が無数に存在する

前章で既に述べたように、等語線は「何らかの言語特徴を共有する地域と、共有しない地域との境界を示す線」と定義づけられているが、こういった言語特徴を基準として等語線を引くかは研究者の判断に委ねられている。例えば、語彙巻 005 “下雨”（雨が降る）では、動詞の差異に着目した“下 X”と“落 X”、目的語の差異に着目した“X 雨”と“X 水”などといった対立が存在しており、いずれの言語特徴も等語線を引く基準になりえる。あるいは、“下雨”“下水”“落雨”“落水”“荡雨”“做雨”のように、動詞と目的語の両方に着目した分類基準を設けることもできる。更には、“下雨”の中でも[ɕia y]と[ɕia y]、“落水”の中でも[lou sui]と[lɔk sui]のように音声の変種に着目して分類することもできる。このように等語線を引く基準は様々なレベルで設定可能であり、全てを考慮してはきりがなくなってしまう。そこで重要となるのは、地図の規模や等語線を引く目的によって、基準を変えるということである。本研究は広域地図を研究対象とし、漢語北方方言における主要な地域差を明らかにすることが目的であるため、該当地図における最も大きな差異に注目して線を引く必要がある。つまり“下雨”の地図で言えば、“下”系と“落”系という動詞の違いを基準とするのが妥当であると考ええる。

⁶『漢語方言地図集』では、併用型の場合、新たに別の記号を設けている。例えば“蛇”のみ使用する地域は「白い丸」、「蛇」「长虫」を併用する地域は「赤い十字架」、「长虫」のみ使用する地域は「赤い丸」となっている。なお、地図上の記号や色の使い方に関しては、次章を参照されたい。

3. 依拠資料と基礎作業

3. 1 依拠資料『漢語方言地図集』について

本研究の依拠資料である『漢語方言地図集』は、2008 年に中国で刊行された漢語方言の項目地図集である。「項目地図」とは、どのような言語特徴がどの地域に現れるかを項目ごとに表示した地図であり、方言地理学の先駆けとなった『フランス言語地図』(1902-1910)や我が国を代表する方言地図集『日本言語地図』(1966-1974)もこの形式をとっている。一方、かつて中国社会科学院とオーストラリア人文科学院が共同で編纂した『中国語言地図集』(1983-1987)は、方言の地域区分を反映させた「区画地図」となっている。『漢語方言地図集』の概要を簡潔にまとめると、以下の表のようになる。更に詳しい内容については、地図集の序文、日本中国語学会(2009)⁷、李如龍(2009)などを参照されたい。

調査地域	中華人民共和国・台湾の漢語が話されている地域
調査地点	全国を網羅する 930 地点 北方:3~4 つの県に 1 地点 南方:1 つの県に 1 地点
調査対象者	1931 年~1945 年に出生した男性(例外あり ⁸)
調査項目	音声・文法・語彙に関する 1005 項目 (『漢語方言地図集調査手冊』 ⁹)
地図項目	音声 205 枚、語彙 203 枚、文法 102 枚、計 510 枚
調査方法	現地に出向き、インフォーマントへの面接調査
調査担当者	中国、台湾、日本、米国の研究者 46 名

【表 1】『漢語方言地図集』の概要

『漢語方言地図集』の概要は前述した通りだが、収録されている方言地図はどのような構成になっているのだろうか。ここでは語彙巻 118“雨傘”(雨傘)を例に挙げ、語形の分類基準、色・記号の使い方などについて説明する。

⁷『中国語学 256 号』では、『漢語方言地図集』の書評が特集として組まれており、林英津(音声巻)・太田斎(語彙巻)・ラマール・クリスティーン(文法巻)がそれぞれ担当している。

⁸ 1930 年以前に出生した割合が 14.9% (139 人)、1946 年以降に出生した割合が 17.6% (164 人)、また女性の割合が 1% (9 人)となっている。

⁹『漢語方言地図集』を作成するために作られた独自の調査票である。

【図 4】は、“雨傘”の地図の左上に記載されている説明部分を拡大したものである。分類基準を見ると、“雨傘”の方言語形は、まず 4 つの大きなグループに分けられていることがわかる。4 つとは、語幹が“傘”のもの、“遮”のもの、“盖”のもの、“撐”のものである。例えば、語幹が“傘”のグループは、“雨傘”“布傘”“洋傘”など修飾成分はそれぞれ異なっているものの、“傘”を語義の中心としている点ではみな共通している。本稿では、このような大きなまとまりを「大類」と呼ぶことにする。同一の大類に属するものは、必ず同じ色の記号が使用されている。

1 つの大類の中には、多くの場合、複数の小さなグループが含まれている。本稿ではこれを「小類」と呼ぶことにする。“雨傘”の地図で言えば、先ほど例を挙げた“雨傘”“布傘”“洋傘”などが1つの小類として立てられている。同一の小類に属するものは、必ず同じ色・同じ記号が使用されている。ただし、全く同じ記号であっても、それは漢字で表記した場合同じになるというだけであって、音声面では大きな差異も見られる。

雨傘 “Umbrella”			
○ 雨傘	● 遮	● 雨盖	● 撐花儿
✚ 雨傘～傘	● 遮～傘	● 雨盖～傘	● 撐花儿～傘
↑ 雨傘～洋傘	● 遮一	▲ 竖笠	● 撐花儿～雨傘
↓ 雨傘～布傘	▲ 雨遮	◆ 雨件	● 撐花儿～撐子
∧ 雨傘～凉傘	▼ 雨遮～傘		★ 撐子～傘
● 洋傘	◆ 雨遮～雨傘		
● 洋傘～凉傘	◆ 雨遮～布傘		
▲ 布傘	↑ 洋遮		
◆ 凉傘	↓ 布遮		
○ 傘			
◎ 傘一			

【図 4】「語彙卷 118“雨傘”」の分類基準」

3. 2 本研究における基礎作業について

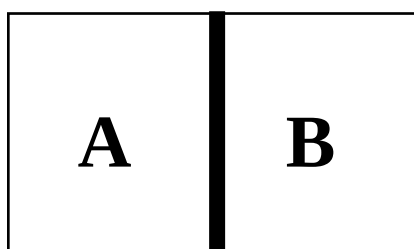
次に、本研究において筆者が実際におこなった基礎作業の概要を紹介する。従来の研究の多くは、結果のみを提示し、そこに至るまでの経緯や各作業を進める上での不都合な点などが公開されてこなかった。本稿では今後の研究のためにも、基礎作業の内容を具体的に記録しておくことにする。本研究では、大きく分けて 3 段階の基礎作業をおこなった。その内容は、①地図上に等語線を引き、②透明シートに写し取り、③分類するというものである。

(1) 等語線を引く

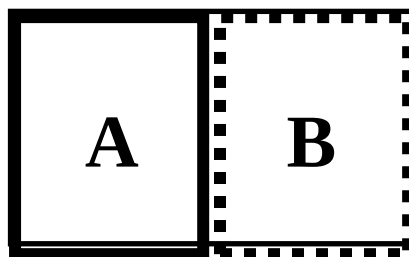
本研究における基礎作業は、等語線を引くことから始まった。『漢語方言地図集』に収録されている 510 枚の地図を作業用に複写した後、各方言地図の分布状況を観察しながら、地図上に直接等語線を引いた。1 枚の地図に数種類の異なる等語線を何本も引くため、カラーペンを使用し、色分けをおこなった。また、後の混乱を防ぐため、地図の余白には、各等語線の基準を記載し、使用した色のペンで下線を引いた。

なお、等語線を引くにあたっての基準は、原則『漢語方言地図集』の大類としたが、筆者が不適切だと判断した場合は調整を加えた。これは、等語線をめぐる諸問題や『漢語方言地図集』が抱える問題点を、可能な限り排除するためである。その他の分類基準や注意点については、次の通りとする。

- ・等語線は、同一あるいは類似した言語特徴が 6 地点以上隣接分布している場合に引くものとし、5 地点以下に関しては捨象する。
- ・項目によっては、分類しきれなかったものを「その他」として集めた大類が存在する。このように、分類基準がはっきりしないものに関しては捨象する。
- ・従来の方言研究では、等語線は「ある言語特徴を有する地域と有さない地域との境目」、つまり 2 つのグループが接する地域のみに引くものとされていた(【図 5】参照)。しかし本研究では、「どこで対立しているのか」という点だけではなく、「ある言語特徴を有する領域がどこまで広がっているのか」といった点も考察の対象とするため、【図 6】のように、該当する地域全体を線でぐるりと囲む形式をとる。



【図 5】「対立型の等語線」

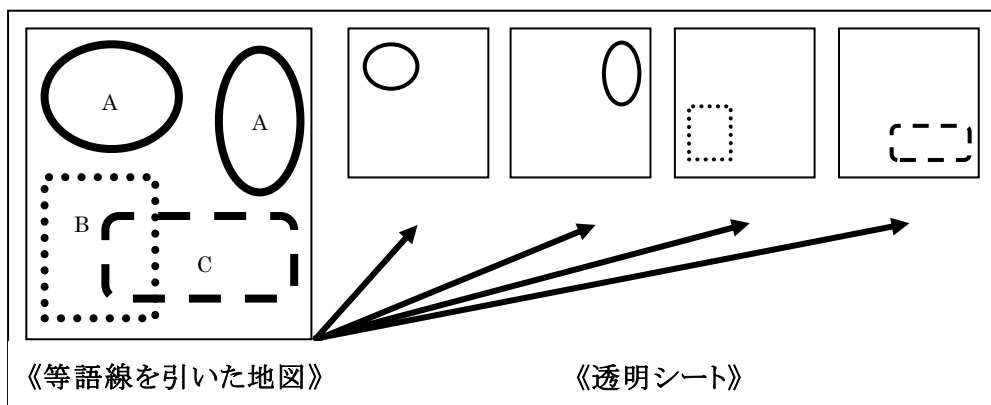


【図 6】「一致型の等語線」

（２）透明シートに写し取る

次に、等語線を引いた地図の上に透明シート¹⁰を重ね合わせて、ペンで線を写し取っていった。この作業の目的は、「等語線を分類する」という次の行程をやりやすくすることにある。

透明シートへ写し取り方は、研究の目的によって異なる。本研究では、「ある言語特徴を有する領域がどこまで広がっているのか」「隣接分布はどこで途切れるのか」という観点から等語線を分類するため、1本の等語線につき1枚の透明シートを使用した。つまり、等語線の途切れを意味する遠隔分布については、別個に扱うものとした。透明シートに写し取る過程を図式化すると、【図 7】のようになる。【図 7】のケースで言えば、1枚の方言地図につき、合計で4枚の透明シートを使用することになる。



【図 7】「等語線を透明シートに写し取る過程」

¹⁰ 本研究では、OHP フィルムを使用した。

(3) 等語線を分類する

等語線を透明シートに写し取り終えた後、以下の分類作業をおこなった。

まず、本稿では漢語北方方言を研究対象としているため、長江以北および西南地区の等語線のみを抽出し、その他のものは捨象した。次に、「分布領域の類似性」に着目した分類をおこなった。すなわち、等語線内の分布領域が類似しているものを集めて、1 つのグループとするのである。その他の分類基準や注意点については、次の通りとする。

・分布領域の類似性は、数値などによる明確な指標を設けるのではなく、あくまで筆者の印象やイメージをもとに、恣意的に決めるものとする。

・1 つのグループとして認定する条件は、等語線が 2 つ以上重なった場合とする。ただし、以下に示すような項目間に強い関連性が認められるものは捨象する。

①同一の事象を異なる視点から分析しているもの：語彙巻 002“月亮”(月)・語彙巻 003“月亮的拟人称呼”(月の擬人呼称)など

②派生的な語法や語彙：文法巻 035“在他～家”(彼は家にいる)・文法巻 036“在他～城里工作”(彼は城内で仕事をしている)・文法巻 037“在他坐～椅子上”(彼は椅子に座っている)など

③概念が対になっているもの：語彙巻 044“外祖父”(母方の祖父)・語彙巻 045“外祖母”(母方の祖母)など

・等語線を分類する際は、分布領域が広いものを優先的に扱うものとする。

4. 漢語北方方言における等語線と方言境界線

4. 1 漢語北方方言における等語線と方言境界線

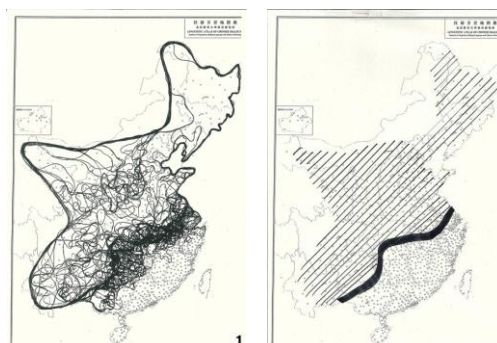
本章では、前章で述べた基礎作業の結果について説明する。漢語北方方言の等語線を「分布領域の類似性」に着目して分類すると、少なくとも 30 グループつくることができた。以下グループごとに、①「等語線を重ね合わせた原図」、②「原図を模式化した図」、③「主な分布領域徴」、④「該当する項目数および音声(P-honetics)・文法(G-grammar)・語彙(L-exicon)の内訳」を記載した。模式図は等語線を重ね合わせた結果をもとに、主な分布領域を斜線で示し、方言境界線が現れたものについては太い線で書き示した。

漢語北方方言における方言境界線と方言区画

【グループ 1】

主な分布領域 長江以北および西
南地区一帯

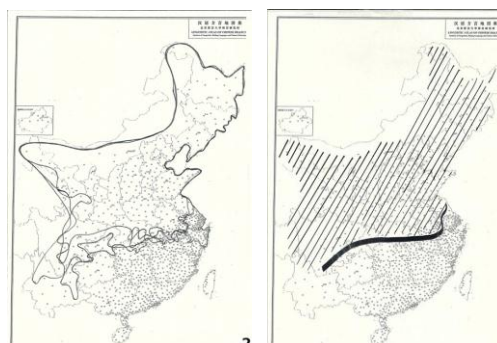
項目数 51 (P20・G8・L23)



【グループ 2】

主な分布領域 長江以北一帯

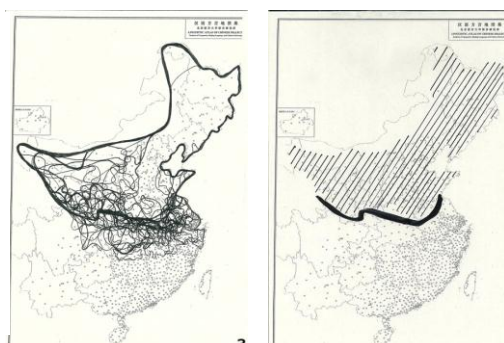
項目数 3 (P1・G0・L2)



【グループ 3】

主な分布領域 山東省・河南省・
陝西省・甘肅省以北一帯

項目数 28 (P7・G6・L15)

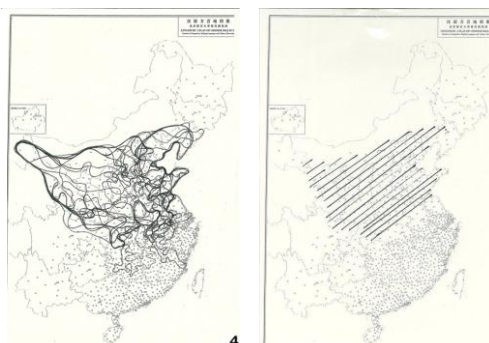


【グループ 4】

主な分布領域 遼寧省・河北省・内
蒙古自治区南部・山西省・陝西省・
寧夏回族自治区・甘肅省・山東省・
河南省一帯

項目数 9 (P3・G0・L6)

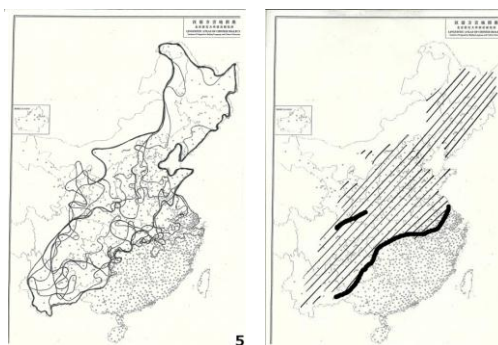
※方言境界線なし



【グループ 5】

主な分布領域 黒竜江省・吉林省・遼寧省・河北省・山東省・山西省・河南省・湖北省・陝西省・寧夏回族自治区・四川省・貴州省・雲南省一帯

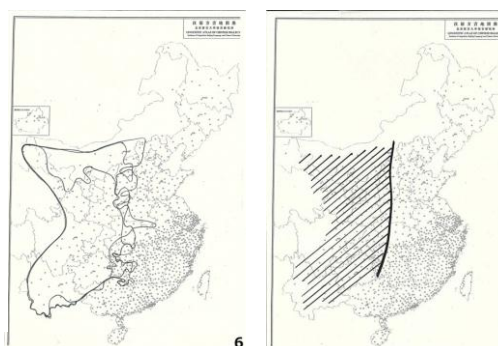
項目数 6(P1・G2・L3)



【グループ 6】

主な分布領域 内蒙古自治区西部・陝西省・重慶市・貴州省以西一帯

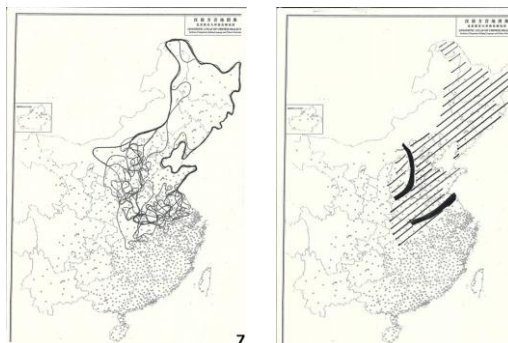
項目数 3(P0・G1・L2)



【グループ 7】

主な分布領域 河北省・河南省・江蘇省・安徽省以北一帯

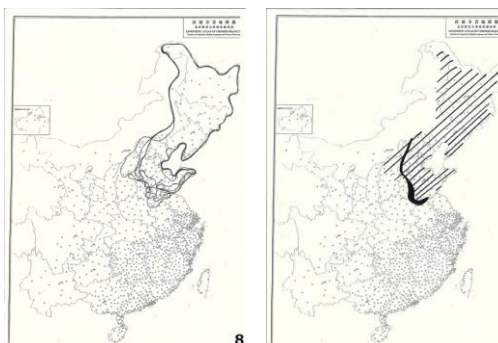
項目数 8(P0・G1・L7)



【グループ 8】

主な分布領域 黒竜江省・吉林省・遼寧省・河北省・山東省一帯

項目数 4(P1・G0・L3)



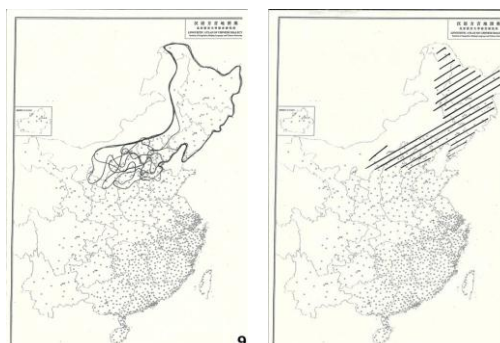
漢語北方方言における方言境界線と方言区画

【グループ 9】

主な分布領域 黒竜江省・吉林省・遼寧省・河北省・内蒙古自治区
東部中部一帯

項目数 6(P1・G1・L4)

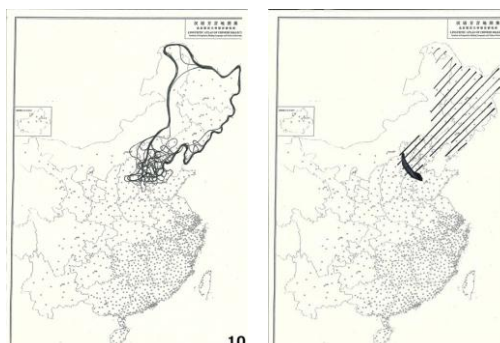
※方言境界線なし



【グループ 10】

主な分布領域 黒竜江省・吉林省・遼寧省・河北省一帯

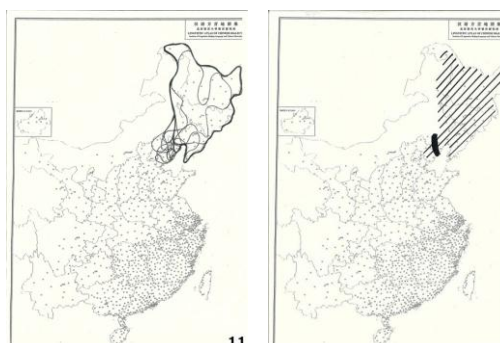
項目数 18(P9・G1・L8)



【グループ 11】

主な分布領域 黒竜江省・吉林省・遼寧省一帯

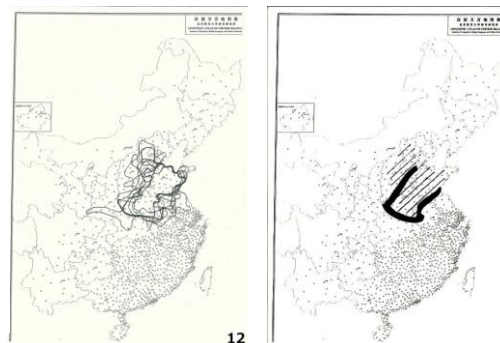
項目数 10(P1・G1・L8)



【グループ 12】

主な分布領域 河北省南部・山東省・河南省・安徽省北部一帯

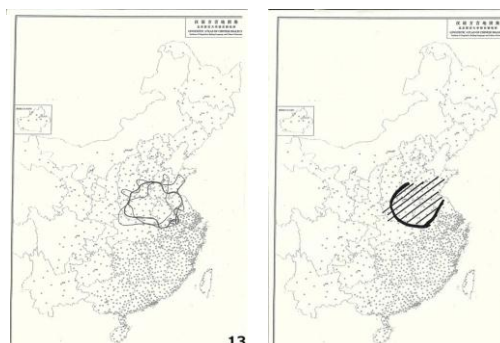
項目数 8(P2・G3・L3)



【グループ 13】

主な分布領域 山東省南部・河南省・江蘇省北部・安徽省北部一帯

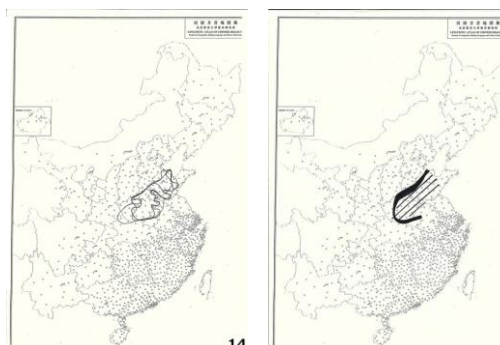
項目数 4 (P2・G0・L2)



【グループ 14】

主な分布領域 山東省西部・河南省一帯

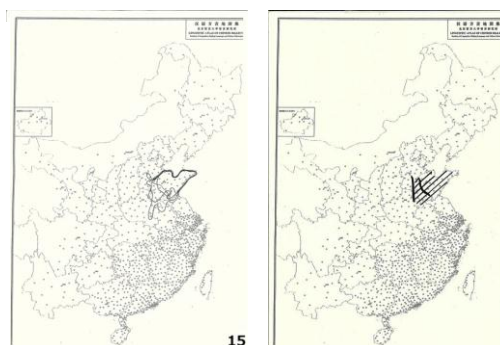
項目数 3 (P0・G2・L1)



【グループ 15】

主な分布領域 山東省一帯

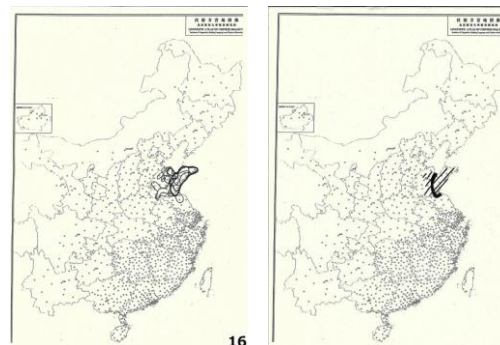
項目数 5 (P2・G0・L3)



【グループ 16】

主な分布領域 山東省東部一帯

項目数 14 (P10・G2・L2)

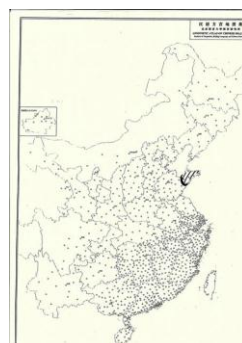


漢語北方方言における方言境界線と方言区画

【グループ 17】

主な分布領域 山東半島一帯

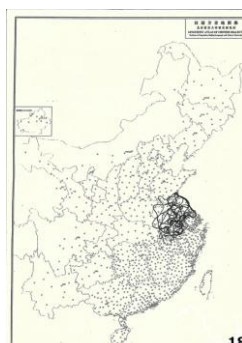
項目数 9(P4・G2・L3)



【グループ 18】

主な分布領域 江蘇省北部・安徽省一帯

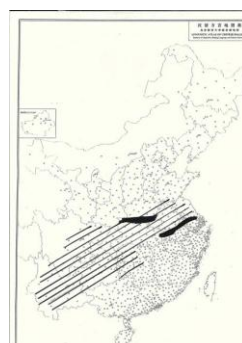
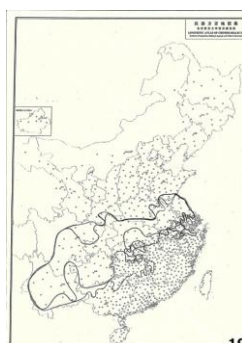
項目数 9(P2・G2・L5)



【グループ 19】

主な分布領域 江蘇省・安徽省・湖北省・重慶市・貴州省・四川省・雲南省一帯

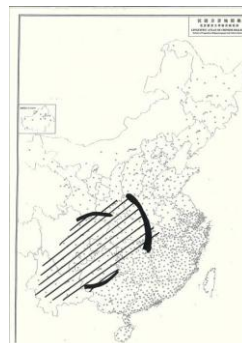
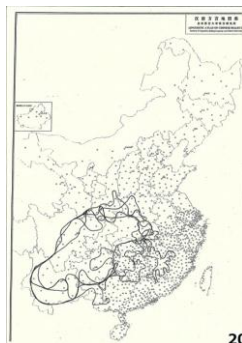
項目数 2(P0・G0・L2)



【グループ 20】

主な分布領域 湖北省・四川省東部・重慶市・湖南省北西部・貴州省・雲南省一帯

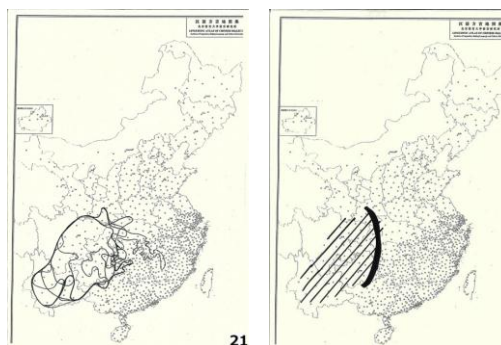
項目数 4(P1・G0・L3)



【グループ 21】

主な分布領域 四川省東部・重慶市・貴州省・雲南省一帯

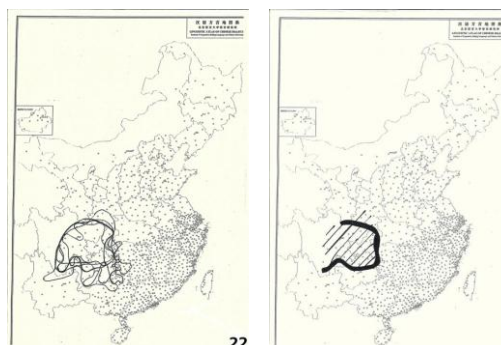
項目数 5 (P2・G0・L3)



【グループ 22】

主な分布領域 四川省東部・重慶市・貴州省一帯

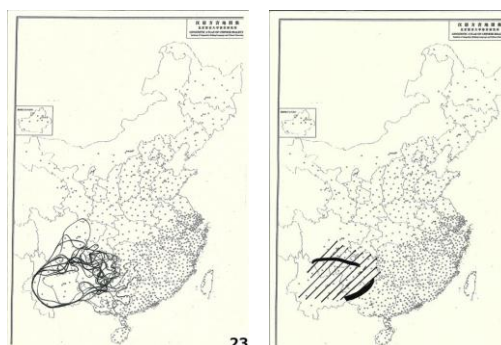
項目数 6 (P0・G0・L6)



【グループ 23】

主な分布領域 貴州省・雲南省一帯

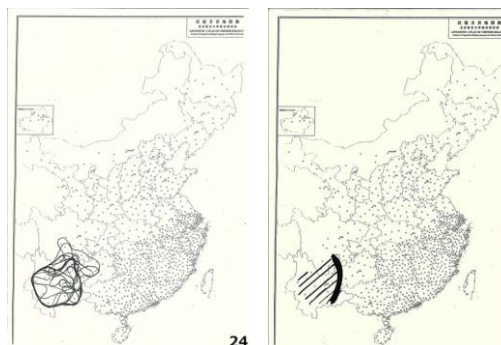
項目数 12 (P1・G1・L10)



【グループ 24】

主な分布領域 雲南省一帯

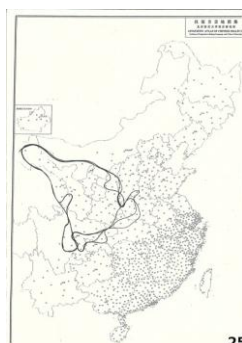
項目数 18 (P7・G5・L6)



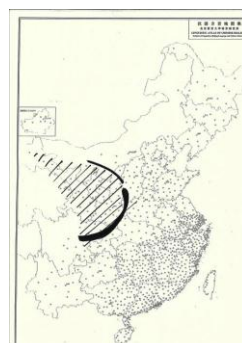
【グループ 25】

主な分布領域 甘肅省・寧夏回族自治区・陝西省・四川省北東部一帯

項目数 3(P0・G0・L3)



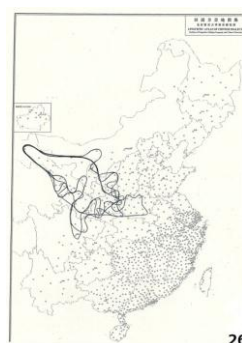
25



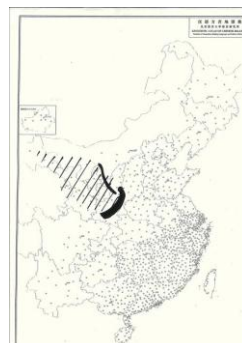
【グループ 26】

主な分布領域 甘肅省・寧夏回族自治区・陝西省一帯

項目数 5(P0・G1・L4)



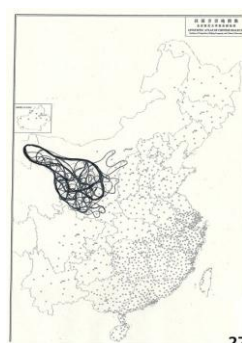
26



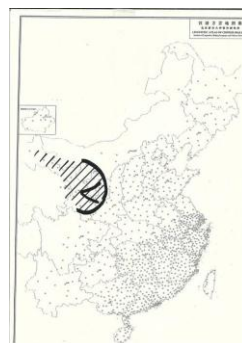
【グループ 27】

主な分布領域 甘肅省・寧夏回族自治区一帯

項目数 21(P11・G5・L5)



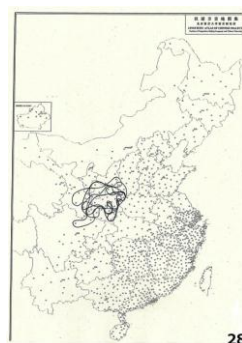
27



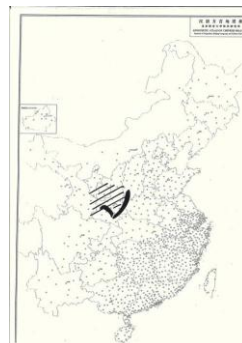
【グループ 28】

主な分布領域 陝西省中部・甘肅省東部一帯

項目数 8(P6・G1・L1)



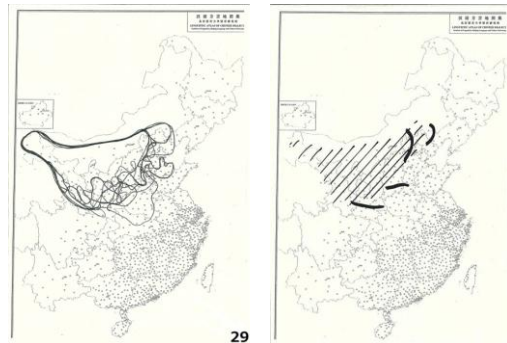
28



【グループ 29】

主な分布領域 内蒙古自治区西部・甘肅省・寧夏回族自治区・陝西省北部中部・山西省一帯

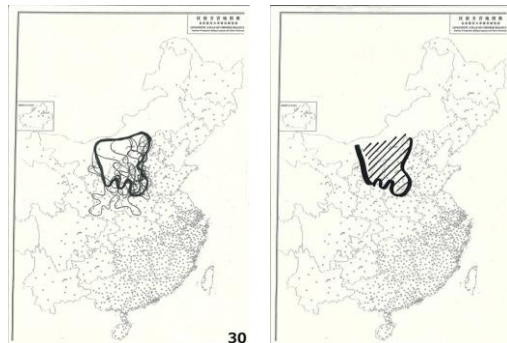
項目数 8(P4・G0・L4)



【グループ 30】

主な分布領域 山西省・内蒙古自治区中部・陝西省北部一帯

項目数 20(P15・G1・L4)



4. 2 小結

等語線重ね合わせ法の実践により、漢語北方方言における方言境界線について以下のことが明らかとなった。

・【グループ 1】【グループ 3】【グループ 6】に現れる方言境界線は、先行研究で指摘されている「長江線」「淮河線」「阿那線」とそれぞれ一致した。これによって、先行研究で指摘されてきた方言境界線の裏付けを取ることができたのと同時に、これらの方言境界線を構成する等語線の項目を新たに補充することができた¹¹。

・長江線と淮河線は漢語北方方言における二大方言境界線であり、前者は漢語北方方言の南限を示すものとして、後者は漢語北方方言を大きく二分するものとして重要であることが改めてわかった。

¹¹ 修士論文では、参考資料として各グループに属する項目の一覧表を記載したが、本稿では紙幅を考慮して割愛した。

・本研究によって、新たな方言境界線も明らかとなった。とりわけ、「山西省東部の境目と河北省西部の境目」、「山西省南東部と河南省北西部の境目」、内蒙古自治区南西部と寧夏回族自治区北東部の境目」には、大きな方言境界線が走っていることが明らかになった。

5. 漢語北方方言における方言境界線と方言区画

5. 1 漢語北方方言における方言区画

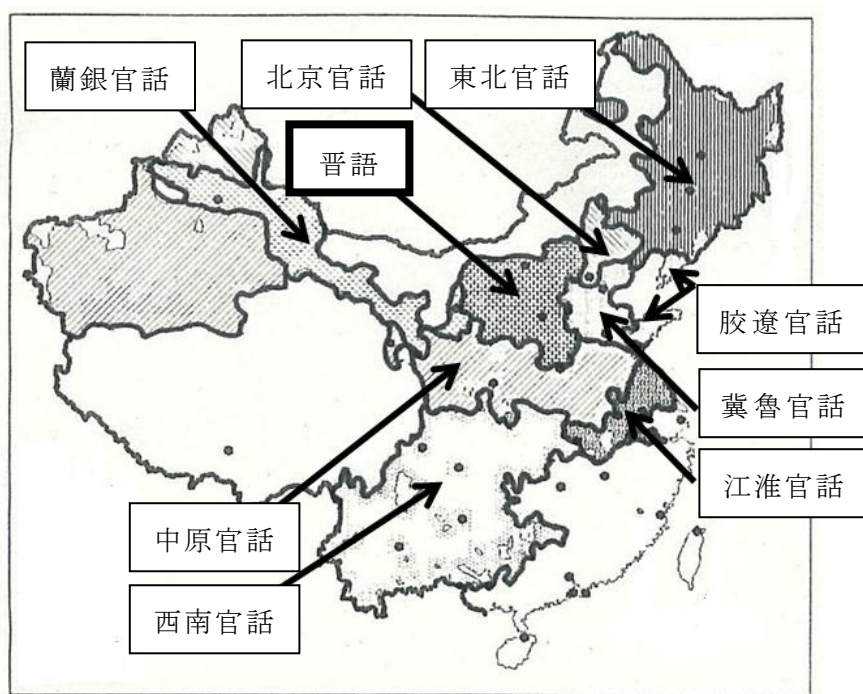
方言区画とは、方言を基準とした地域の区分を指す。現行の漢語方言区画は、「漢語官話方言分布簡図¹²⁾」や「普通話基礎方言分区示意図¹³⁾」など複数存在するが、中でも最も権威があるのは、中国社会科学院とオーストラリア人文科学院が共同で編纂した『中国語言地図集』である。

この地図の特徴は、主に2つあると思われる。1つ目は、「官話」「呉語」「湘語」「贛語」「客家語」「閩語」「粵語」という従来の方言区画に加え、「晋語」「徽語」「平話」を新たに別個の方言区として打ち立てていることにある。つまり、漢語北方方言はここにきて初めて官話と晋語に分けられることとなったのである。「晋語」とは、李栄によって「山西省およびその周辺地域の入声を持つ漢語方言」と定義づけられた概念である。李栄・侯精一をはじめとする“晋語独立論者”は、晋語を官話から独立させる理由について、「山西省が持つ閉鎖性という地理的要因によって、入声をはじめとする古い時代の音韻体系が現在も比較的多く保持されているため」と述べている。これに対して丁邦新・王福堂などは、晋語の特異性を認めながらも、七大方言と同じレベルで晋語を扱うことに関して疑問を投げかけている。反論の根拠としているのは、主に「官話と晋語の差は七大方言間の差ほど大きくはない」「晋語の特徴として入声の保有を主張しているが、入声を保有している官話は晋語以外にも存在する」という点である。

¹²⁾ 『中国大百科全書・語言文字』収録

¹³⁾ 『普通話基礎方言基本詞彙集』収録

2 つ目の特徴は、官話が「古入声の帰属状況」という音声的特徴に基づき、「東北官話」¹⁴「北京官話」「冀魯官話」「胶遼官話」「蘭銀官話」「中原官話」「西南官話」「江淮官話」の 8 つに下位区分されている点にある(【図 8】【図 9】参照)。古入声の帰属状況による分類とは、中古音の入声字¹⁵が、現在の方音においてどのような声調を有しているのかという点に基づいた分類を指す。北方方言の多くは、入声が消失し、他の声調と合流しているため、入声が保存されているものは一類とし、消失しているものは「どの声調と合流しているのか」という点に着目することで分類が可能となる。



【図 8】『中国語言地図集』『中国漢語方言図』¹⁶

¹⁴ ただし、東北官話の分類基準は他のものと様相が異なる。李栄 (1989) によると、「古入声の帰属状況」という観点から言えば、東北官話と北京官話は一類となるべきだが、①陰平の調値が北京官話よりも低い、②声母に [ʒ] が存在しない (北京官話の [ʒ] 声母は、東北官話ではゼロ声母となる) といった点を踏まえて、あえて両者を別々の方言区として認めている。

¹⁵ 中古音には、四声 (平声・上声・去声・入声) があつたとされている。

¹⁶ 原図は、項・曹 (2005) に基づくが、図の見やすさを考慮して、筆者が若干の加工をおこなった。

	西南官话	中原官话	冀鲁官话	兰银官话	北京官话	胶辽官话	江淮官话
古清音	阳 平	阴 平		去 声	阴阳上去	上 声	入 声
古次浊		阴 平	去 声				
古全浊		阳 平					

【図 9】「各官話における古入声字の調類」¹⁷

5. 2 結論

本節では結論として、以下の 2 点について言及する。1 つ目は「本稿で明らかとなった等語線・方言境界線から見て、現行の漢語方言区画（『中国語言地図集』『中国漢語方言図』）は妥当であるのか」という点であり、2 つ目は「方言区画を作成する際、どのような点を考慮すべきなのか、あるいはどのような手法を用いるべきなのか」という点である。

（1）方言区画の妥当性について

まず、長江以北および西南地区一帯を主な分布領域とする【グループ 1】が 51 (P20・G8・L23) という最多の項目数を有していることから、漢語北方方言としてのまとまりが南方方言に対立する存在として揺るぎないものであることが証明された。

次に各方言区について言えば、「中国漢語方言図」における晋語と蘭銀官話は、方言境界線および分布領域の類似性いずれの観点から検証しても、その妥当性が証明された。とりわけ晋語に関する等語線は非常に多く、「小結」で挙げた 3 つの方言境界線も、全て晋語と隣接する方言区との境界と一致した。すなわち、①「山西省東部と河北省西部の境目」は晋語と冀魯官話の境目、②「山西省南東部と河南省北西部の境目」は晋語と中原官話の境目、③「内蒙古自治区南西部と寧夏回族自治区北東部の境目」は晋語と蘭銀官話の境目となっている。晋語独立論に賛同するかは別としても、やはりその特異性は際立っていた。東北官話と一致する等語線のまとまりとしては【グループ 11】があるが、東北官話と北京官話がひとまとまりとなっている【グループ 10】のほうが該当する項目数も多く、音声・文法・語彙のバランスも良

¹⁷ 原図は、李栄（1989）に基づく。

かった。更に、脚注 12 で述べたように、「古入声の帰属状況」という観点から言えば、東北官話と北京官話は同一グループである。よって筆者は、両者をまとめて 1 つとするならば、この方言区も妥当であると考え。胶遼官話と冀魯官話に関しては考察するまでに至らなかったが、こうして見てみると、漢語北方方言内でも北部に位置する方言区は、多くの点で等語線重ね合わせ法の結果と一致していることがわかる。

これに対し、漢語北方方言内でも中部・南部に位置する中原官話・西南官話・江淮官話は、その方言区画の有り方に疑問を投げかけることとなった。まず、中原官話と一致する等語線は、入声を除くと一例も見当たらなかった。着眼点を変えて等語線を引けば、一致する等語線が見つかる可能性もあるが、中原官話という枠組みのもろさが顕著に表れた結果となった。また、西南官話と一致する等語線のまとまりは【グループ 20】であるが、該当する項目数は 4(P1・G0・L3)と少なく、江淮官話と一致する等語線のまとまりは【グループ 18】であるが、江蘇省西部は等語線が入り組んでおり、方言境界線が引けなかった。確かに、「古入声の帰属状況」という 1 点に基準を当てて分類すると、その言語現象に関しては、全ての方言区が同じ重みを持っていることになる。しかし、その他多くの言語特徴も考察対象に加えてみると、中原官話・西南官話・江淮官話と一致する項目は非常に少なかった。つまり、漢語北方方言内でも中部・南部に位置する方言区は北部に位置するものに比べて強度は低く、妥当性についても「保留」という結論になった。

(2) 方言区画を作成する際に考慮すべき点および作成の手法

奥村(1984)では、方言区画作成の手法として「諸言語現象分布図の重ね合わせ法を推奨しており、また筆者としても、より多くの等語線を積み重ねていくことこそが合理的な方言区画の作成に繋がると考えていた。しかし、方言区画が明確な線によって地域を区画するものだとすれば、等語線重ね合わせ法のみでは方言区画を作成することはできない。なぜなら、方言境界線は“線”という名がありながらも、実際は“帯”として現れるからである。等語線重ね合わせ法のみで明らかにできるのは「方言区画」ではなく、言語特徴を総

合的に反映させた「方言圏」¹⁸である。方言圏そのものは、1 つの重要な研究テーマとなりえるため、等語線重ね合わせ法による方言圏の解明を今後もおこなっていく必要がある。

しかし方言圏ではなく、明確な線によって地域を区画する方言区画を作成するならば、やはり何らかの基準が必要となる。この基準を決める際に、等語線重ね合わせ法の結果が応用できる。すなわち、等語線重ね合わせ法によって明らかとなった方言境界線を参考とし、対象となる地域を最も合理的に分類できる言語特徴をいくつか探すのである。更に、特定の言語特徴に基づいて区画された方言区が妥当であるかどうかを、再び等語線重ね合わせ法の結果と照らし合わせて検証し、妥当でなければ修正をおこなう。つまり、等語線重ね合わせ法の結果のみでは方言区画は導き出せないが、その結果を補助的に用いることで、様々な言語特徴を総合的に反映させた方言区画を完成させることができるのだ。

なお、合理的な方言区画を作成するのが難しい場合は、日本の方言区画研究のように、多角的な視点から等語線重ね合わせ法による方言区画地図を何種類も作成するべきである。そのためには、方言地理学の研究成果が一層必要となるだろう。

[参考文献]

- ・井上史雄 2001, 『計量的方言区画』, 明治書院
- ・岩田礼 1995, 「漢語方言に於ける地域差と分布の型－方言分布の動態と静態」, 平田昌司編『中国の方言と地域文化(2)漢語方言地図集』, 科研費

¹⁸ 「方言区画」と「方言圏」の違いについて、加藤（1977）では以下のように説明しており、本稿もこの考え方に準ずる。“区画は人為的に区切った範囲の場所であるのに対し、「商圈」「通勤圏」「文化圏」などと同じ考え方による「方言圏」という概念は、中核があって、それを中心として同質の言語の分布する範囲をとらえている。したがって方言圏の外周部分は漠としたものになり、その意味では土地の範囲は必ずしも確定できない。この方が言語分布の実態に即しているかもしれない。同じく方言分布を材料として土地をまとめた考え方でも、方言区画と方言圏では、外側からと、中心ということで、まとめ方の方向が逆になる。”

研究成果報告書

- ・岩田礼 2000,「現代漢語方言の地理的分布とその通時的形成」, 遠藤光
暁編『中国における言語地理と人文・自然地理(7) 言語類型地理論シンポ
ジウム論文集』, 科研費研究成果報告書
- ・王育徳 1967,「中国の方言」, 牛島徳次ほか編『中国文化叢書 1 言語』,
大修館書店
- ・王福堂 1999,『漢語方言語音的演變和層次』, 語文出版社
- ・奥村三雄 1984,「方言区画論」, 飯豊毅一ほか編『講座方言学 2 方言研
究法』, 国書刊行会
- ・加藤正信 1977,「方言区画論」,『岩波講座日本語 11 方言』, 岩波書店
- ・項夢冰・曹暉 2005,『漢語方言地理学-入門与实践』, 中国文史出版社
- ・侯精一 1999,『現代晋語的研究』, 商務印書館
- ・O.I.Zavyalova & E.B.Astrakhan1998,「The Linguistic Geography
of China」, 遠藤光暁編『中国における言語地理と人文・自然地理(1)』, 科
研費研究成果報告書
- ・柴田武 1960,「ドイツ・ザクセン地方の言語地理学」, 広島方言研究所編
『方言研究年報 3』
- ・柴田武 1977,「ことばの地域差」,『岩波講座日本語 11 方言』, 岩波書店
- ・曹志耘 2008,『漢語方言地図集』, 商務印書館
- ・曹志耘 2011,「漢語方言的地理分布類型」『語言教学与研究 2011 年第 5
期』, 北京語言大学語言研究所
- ・田中春美 1988,『現代言語学辞典』, 成美堂
- ・中国社会科学院・オーストラリア人文科学院 1987,『中国語言地図集』, 朗
文出版
- ・徳川宗賢 1962,「等語線をめぐって」日本方言研究会編『日本の方言区
画』, 東京堂出版
- ・日本中国語学会 2009,『中国語学』256 号
- ・李栄 1985,「官話方言的分区」, 中国社会科学出版社編『方言』(1985 年
第 1 期)

漢語北方方言における方言境界線と方言区画

- ・李栄 1989,「漢語方言的分区」, 中国社会科学出版社編『方言』(1989 年第 4 期)
- ・李如龍 2009,「漢語方言的地理語言学研究大有可為」, 中国社会科学出版社編『方言』